

But all the great creative actions,
all the decent human relations, occur during the intervals
when force has not managed to come to the front.
These intervals are what matter.
I want them to be as frequent and as lengthy as possible,
and I call them " civilization " .

What I Believe
from " Two Cheers for Democracy "
E.M.Forster

はじめに

この小冊子は、2012年度奈良女子大学文学部専門科目「身体文化学演習〔担当：鈴木康史〕」の授業を受講した学生たちによる論文集です。

発端は2年前の東日本大震災の年に行われた文学部の「震災ウィーク」という一連の授業でした。この授業は最終的に、文学部まほろば叢書『大学の現場で震災を考える“文学部の試み”』（2012.3）に結実したのですが、私はそこでこのようなことを書いています。

大災害に対して「文化」は何ができるのか？…「震災ウィーク」は、一つの始まりに過ぎない。来年度の授業では一五コマを使い、学生たちと共にこの問いについて考える。長い道のりの第一歩である。またチャンスがあれば、それについてはどこかで報告できればと思っている。

そのちょうど一年後、ここにこうして「報告」をお目にかけることができました。それもこれも、私に付き合ってくれた学生たちの努力のおかげです。

例年の私の「演習」は毎コマ一人の発表者を決めるよくある形のものでしたが、これは自分の発表を何とかこなせば、残りの14コマは気楽に…、という悪いパターンに陥りがちでした。どうすれば学生たちの不断の努力を引き出せるのか。この授業はその一つの答えになったのかもしれませんが。彼女たちは、ある一つのことがらについてとことん考え抜くという、われわれが最も重視していることの一つを、半年かけて成し遂げてくれたのではないかと思います。

内容は、3.11に関連した事柄がやはり多くなってはいますが、必ずしもそれに限ったものではありません。学生たちが日ごろ見聞きし考えていることを、裏付けとなる資料と論理的な言葉で語り直してくれた、そういう「論文」だと思います。

もちろん「論文」といってもまだまだ未熟なものです。彼女たちの言葉を借りれば「報告」（彼女たちが決めたこの本のタイトルも偶然「報告」でした）に過ぎないものかもしれません。しかしこれは、彼女たちが自分の中に見つけたひらめきを、大学の外の多くの方々に読んでもらえるような形にしようと、生まれてはじめて悪戦苦闘した、その「中間報告」なのだと思います。彼女たちには卒業論文という本番が先に待ち構えています。そこでどのような「最終報告」を読ませてくれるのか、今から楽しみです。

最後になりましたが、学生のインタビューに快くお答えくださった皆様方、この報告書作成に全面的に協力をくださった教育学・人間学コース担当の先生方、相談に行くといつも的確なアドバイスをくださった、こうした授業の先達、小川伸彦先生に感謝申し上げます。

そして、まだこの授業は終わりを迎えていません。来年度には福島の詩人、和合亮一氏を奈良女子大に迎えての公開講演会をこの授業の学生たちと共に作り上げる予定です。長い道のりの第二歩目です。これもまたチャンスがあれば、どこかで報告させていただければと思っています。

おことわり：「放射能」という言葉について

本書収録の論文中、正確には「放射線」や「放射性物質」というべきところを「放射能」を使っているものがあります。科学的には不正確な用法ですが、人口に膾炙した用法であることから使用しているものです。ご了解ください。